
居場所探しの旅

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居場所探しの旅

【Nコード】

N8978X

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

呪われし者として、生まれてしまった未癒。未癒は、自分の居場所を見つけて、平穩に生きることができるのか？

家出

四年前。それは、私にとっての最後の幸せだった。

「ねえ？おカーさん、まほうおしえて？」

「えっ？魔法？いいわよ」

ここで、母が横に首を振っていたら。そんな考えが、脳裏に描かれる。

「魔法は、空気中の魔気を、集めてその魔気に、お願いするの。こんな風に。」

「……火よ、私の明かりとなり、わが道を照らしたまえ！……」

母の手には、拳一個分ぐらいの大きさの火の玉が現れていた。

「わー、おカーさんすごい」

「そう？この呪文は、自分の想いを言うことで発動するから、呪文は、最低なくても平気よ。でも、魔力っていうのがあって、その人の中に、どれだけ魔気が集まるかっていう、磁石みたいなもの、ね。その、魔力の量しか魔気は集まらないの」

「むずかしくて、わからないよ。おカーさん」

「そう？一応、やってみれば？」

「うん！……ひよ、われのあかりとなり、わがみちをてらしたまえ！……」

私の手には、白い炎が現れる。

「これは？未癒！すぐ炎を消しなさい！……水よ！……何で？何で消えないの？まさか、私の魔力が、この子より弱いつてこと？」

何も、起こらなかつた。否、水が一瞬で蒸発した。刹那、魔気が暴走し、辺り一帯に、白の炎が点火した。炎は、中心に居た私を残し、周囲を燃やした。灰しか残らなかつた。母も、他の人も。

「おかーさん？ どこ？ どこにいるの？」

私は、母の遺体である灰を踏んで外へでた。すると、微かに音がした。耳を澄ます。馬が走る音だ。その音は、着実に近づいてきた。

「おい、何が起きたんだ？」

「あのね、わたしがまほうをつかったらね、みんないなくなっちゃったの。どうして？ お、おかあ、さん、どこ？ おいていかないで、わるいことしてないのに……」

私は、泣いてしまった。この時の私は、皆を殺したとは、気付けなかったから母がいなくなっちゃったことに、ひたすら泣いた。

「呪われし者か。しかし、数百年は記録に残っている限り生まれしていない。何故だ？」

騎士団長の声は、徐々に小さくなっていく。私は、最初の、呪われし者、という言葉しか耳に入らなかった。そのことが、話をややこしくしたのかもしれない。

「俺の家に来るか？」

「いやだ。だって、わたしを『もるもつ』にしようとしているんでしょ？ のろわれしものっていつていたの、きこえたんだから」

「モルモット？ そんなことはしないよ」

それに、と騎士団長は話を続けた。その声は、さっきより厳しくなっていた。

「ここに居たら、君は、不幸になる」

「ほんとう？」

その言葉は、私の着いていけない宣言を、軽く覆した。

「ああ、本当だ」

肯定の返事。

「じゃあ、おじさんについていく」

と、私は答えた。

「おじ……俺のことは、騎士団長と呼べ」

俺、そんなに老けているか？ と、騎士団長は呟いている。

「はい、きしだんちよう」

騎士団長は、満足げに目を細めた。

「じゃあ、着いてきな」

「うん！」

ありがとうございます。私は、自分の居場所を見つけるために、旅に出ます。三日に一度は、連絡するつもりです。連絡がなかった場合、命の危機か、死亡しているので、心配は、そのときだけしてください。未癒。

何か問題がありすぎの手紙のようがするが、気にしない。よし。

転移と、私が呟くと、私は、村の門の前にいた。

「よし、歩くぞー！」

なぜか、後ろから荒い鼻息が聞こえてきた。そろり、と後ろを振り向くと、そこには大きなライオンがいた。

「なーんだ。ビッグキャットか。驚かせないでよ。って、逃げなきゃっ！」

ノリ突っ込みなんてしている暇ないよっ！……まあ、していたけどさ。

「追いつかれたっ！？」まあ、足の速さが違うからねえ。諦めている暇なんてないよっ！

「……炎よ、我が手先となり、燃やしつくせ！……」

赤い炎が、相手を燃やす。金になる部位だけ、残しておいた。今回の場合は牙と肉。大きな猫、か。前から思っていたけど、この名前を考えた人だれ？まあネコ科だけどさ、ネーミングセンスないでしょ。

まあ、過去の人に失礼か。先祖だもんな。まあ、それはさておき、どっちの道に行こうか。個人的には、左がいいような気がする。でも、右もいいかも。よし、棒が倒れた方に行こう。後ろ？引き返させてこと？無理でしょ。じゃ、もう一回。前？樹海に進めって

？虫がいつぱいいるから嫌だ。左？ よし、左に行こう。

現在、悲鳴が聞こえています。よし、間に合わないね。無視しよう。しばらく進むと、死体があった。手を重ねて、祈る。

「ご愁傷様です」

助けに行けなかったが、ご冥福を。

よし、寝よう。

「……………空間よ、私の前に開き、我を招き入れよ……………」

空間が、私の寝室を作ってくれる。ちなみに、この中に私の荷物も入っていたりする。

「朝か、うん。起きよう」朝はやっぱり、朝風呂の後に牛乳だよねっ！

「魔物でも狩って、飯にするか」

善は急げ、だ。さっさと狩りに行こう。草の間から覗いていると、ゼラチンみたいなものでできている魔物を見つけた。あれは、食べないからいいや。他の いた。争っている。このまま待っていれば、漁夫の利である。あれ？なんかこっちを向いたような気がする。よし、気のせいだ。まあ、現実逃避はここまでにして……………はい。今、私逃げています。そうさ、烈火のごとく走るのさ。

「ちっ、しかたない。殺ってやる。ちくしょー、私の漁夫の利作戦が……………」

私の手間を取らせたな？

「……………風よ！刃となりて、切り刻め……………」

私の前に、スプラッタな光景がある。やった奴はひどい奴だ。……………私だけだ。というわけで、私の旅の二日目は、終わったのであります。

家出（後書き）

読んだり見たりしてくださる方、ありがとうございました。

衝突

私が、家を出て1カ月と二日がたった。町だ。かなり大きい。首が痛くなるような高い壁に、小さな門が（危険なものをできるだけ入れないようにするためだろう）ある。そのアンバランスさには、少し笑える。しかし、大きすぎる。私は、この町についての説明が書いてある掲示板を見ながら思った。

新たな居場所を探すにあたって、これほど大きな町は論外だ。人の多さゆえ、個人を見てくれない。この人は、冒険者だからこの枠、この人は、商人だからこの枠、という風に枠に押し込んでしまう。

私が呪われし者だと知られてしまったら、おそらく昔より扱いが酷くなるだろう。しかし、情報は大事だ。私の、良い居場所での楽をする作戦にあたって、大きなステータスとなるだろう。とりあえず、この町のギルドに行つて依頼を受けようと思う。

結果……。簡単だった。ここの依頼は、私の故郷より魔物の強さが遥かに劣る。ぼろ儲けできた。3日間で約1000万円。一日に330万ぐらいの計算になる。これで、軍資金は手に入った。なにか、良い物はないかな。

本が欲しいと思った。書店に寄ろうと決め、私は歩きだした。書店に入ると、中は宝の山だった。もう、籠がいっぱいだ。新しい籠を取ろうとした。が、一冊の本に目移りした。古びた外装からは想像できないような魔気を感じた。大陸中の魔気を凝縮したような、禍々しい。そう思った。ちらつと値段を見ると、一冊、1000万。

は？高いよ？うん、非常に。頭が、混乱してきた。3日で稼いだ私が言うことじゃないけどさ。

「すいませーん！ 店長さん居ますか？」

「はい、今行くよ」

しゃがれた声が返ってきた。

「なんで、この本はこんなに高いんですか？」

「この本は、昔の魔道書だからね」

！？ 魔道書？ あの、都市伝説になっている？ 持った人は殺されるってやつ？

「魔道書？本当ですか？」

「ああ、嘘を言っただけに何のメリットがあるのさ」

「高い本を買わせて実は紙きれで、1,000万ぼったくる、とか？」

老婆は、私の回答に満足したようで、豪快に笑った。

「まあ、その可能性は捨てきれないな。騙されたと思って買ってみたらどうだい？」

「1000万も騙される、と？」

「まあ、こつちの本の会計をするから、その本を買うかどうか決めればどうだい？」

そう言つと、老婆は算盤そろばんを弾き出した。しかたない、籠に入っている分は、魔物の部位を売った分で払うか。終わった見たいだ。

「終わったよ。67万だ。さつさと払いな」

1070万を、レジに置く。

「おお、姉ちゃん金持ちだね」

こんな大金見たことがないよ、と言いながら金を数え始めた。数分後に数え終えた老婆は、本を渡してきた。それを、空間魔法を使って、しまう。老婆が何かを言いたそうにしていたため、こういった。

「さつきの3万は口止め料。貴方意外に知っている人はいないから、町に噂が広がったら、貴方を……」

指を鳴らす。すると、光と闇の龍が現れる。

「殺しにいくわ」

また指を鳴らすと、龍は空気に溶けていった。

「あんたは、敵に回したくないねえ」

老婆は、くつくつと笑いながら言った。

書店を出ると、すでに町は暗かった。親切な荒れくれ者からお金

を恵んでもらおうと思ひ、裏道を通ると、出来ました！ 恐喝者の山が！ ちなみに、全員パンツ以外持っていない。全部、恵んでいただいた。臨時収入が、100万ほど。嬉しい！ 私、やったね！ それはさておき、宿に戻り、寝ようかと考えた。そう、考えた。考えた。うん、3回目。大事だもん。私の安眠を邪魔する大魔王（またの名を勇者と言う）が現れたのだ。とりあえず、殴った上で、死刑だ。私刑じゃなくて。うん。

「それでは、被告人よ、何か言い残すことはないか？」

「何で、いきなり殺されなくちゃいけないんですか？ ノックもしましたし」

女の声だ。

「それでは、処刑を結構します」

「無視？ 無視なの？」

変わらず、女の声だ。

「じゃあ、3、2、1」

「ちよいちよいちよい！ 待って」

想像がつくと思うが女の声だ。

「うむ？ 何だい？ 被告人？」

「何で私刑何ですか？」

完璧に女の声だ。

「大帝国憲法第一条の一項目に書いてある。私の安眠を阻止した生物は、死刑と書いてある」

「なにそれ？ やめてくださいよ」

もう言いたくないが女の声である。……うん、もう止めるよ。

「妖精？」

親切にお話を聞いてあげたら、妖精だという。

「ええ、私の話を聞いてください」

特に人間と変わった所はない。

「嫌だ」

だって面倒くさそうだもん。

「じゃあ、・・・・・・・・えっ？嫌だ？何ですか？」

「厄介事でしょ？ どうせ」

「まあ、そうですね」

何のことだろう、聞いてみても良いかもしれない。

「その本を、譲って欲しいのです！」

あ、何だそんなこと？

え？ いいよ、そんなことなら

「もちろん、お礼はします・・・・・・・・いいっ！？ いいって言

いました？」

「うん、もう暗記したし」

帰りながら読んだもん。

「あの量を、あの時間で？」

「あの時間？ 何故知っている？ まさかお前？」

指を鳴らして魔法を自称妖精に使う。すると、見る見るうちに老婆へと姿を変えた。うん、やっぱり処刑だ。処刑！処刑！はっ！テンションがおかしいことになってしまった。

「気付かれたか、やっぱりあんたは、敵に回すべきじゃなかったねえ。でも、金のためなら私は何でもするよっ！・・・・・・・・落雷よ！この者に！この者に裁きを・・・・・・・・」

「裁きつて、貴方が受けるべきよ！・・・・・・・・落雷よ！この者に裁きを・・・・・・・・」

二つの雷が、空中で衝突した。

衝突（後書き）

うん。テンションがおかしいです。ちなみに老婆は、名前はまだない。これからもずっとない。

死刑

互いの魔法が衝突した。散ったのは、老婆の魔法。続いて、ばしい、という音が聞こえて私の魔法も消えた。

想いの強さが、力となる。無言で腕を振る。同時に全属性の龍が現れ、それぞれが交わった。時、空間、闇、光、水、炎、風、雷、土。全ての属性を併せ持った、合成獣と成り、老婆を襲う。老婆が息をのんだ音が聞こえた。突然、老婆が消える。いや、消えたように見えた。老婆は私の後ろで魔法を使おうとする。

「いつの間につ！」

返答は、無かった。老婆が無言で指を鳴らす。その瞬間、魔法が発動。させなかった。龍が、老婆の背後で攻撃した。老婆は、背中に大怪我を負っている。私の勝ちだ。油断して老婆に近寄ろうとした時、老婆が指を鳴らした。いきなり老婆が、どこかに転移した。

つめが甘かったか、殺っておけば良かった。まあ、ぐじぐじ考えても仕方がない。想像しよう。あの老婆の隣に行くすべを。レポート。私は、あの老婆の後ろにいた。

「なっ！何故だ！何故貴様がここに居る！？」

「私の安眠を邪魔した奴は」
大鎌を構える。いや、ノリですよ、ノリ。いいじゃん、なんか、死神っていうイメージで。

「死刑よ！」

鎌を振り落とす。ごっん、という軽い衝突音。後頭部から、びゅっ、びゅっ、と心臓のリズムと一緒に血が噴き出している。老婆の顔は、心なしか、笑っているように見えた。遺体は、とりあえず、燃やしておこう。

「……火よ、私の明かりとなり、我が道を照らせ！……」

私は、遺体を燃やす時は、この魔法を使うことにしている。遺体を浮かせ、白い火を引火する。一瞬で遺体は灰になり、パラパラと落ちて行った。私の頭には、あの老婆の遺体の顔が、消えては現れた。あの笑い　　明らかな殺意を感じ取れた。まだ、何かあるのだからか？あー！むしゃくしゃする！寝よ。空間魔法を使って、眠りに着いた。

朝だ。誰が何と言おうと朝だ。完璧に朝である。そりゃあもう朝だ。何考えてるんだろ、私。ため息が出てきた。暇だ。ひーまーだー！よし、本読も。

ふう、疲れた。さすがに目がしょぼしょぼした。酒飲んで寝よ。未成年でも知ったもんか。犯罪なんて、気付かれなきゃあ、犯罪じゃねえんだ。ワインを開けて飲む。一応、4年前のワインは、取っておく。高く売れそうだし。・・・・・・2、300年したら。うん、意味なし。時間をワインの周りだけ速く進ませ、美味しくする。うん、美味しい。頭が、くらくらしてきた。そう言えば、私　酒に弱いんだっけ・・・・・・。薄れゆく意識に身をゆだねながらそう思い出した。

死刑（後書き）

七百文字とちよっと。ワードにして、約1枚。ちなみに、いつもは3枚。何が言いたいかというところ……。文字が少なめだということ。すいませんでしたっ！

連鎖（前書き）

はい。シリアス60%、コメディー30%、その他10%のこの作品で、楽しめる人がいたならば、光栄です。

連鎖

老婆を殺害してから、2週間がたった。私は、老婆の死に際の顔を、忘れようと努力したが、その努力は無駄に終わった。地下室のような黒色の目。死神のような不敵な笑い。全てが死を連想させる。四年前以来、初めて、恐怖で震えたった。四年前と同等か、それ以上。そんなレベルだった。怖い、コワイ、こわい。本能が、叫びだす。今すぐに逃げるべきだ、と。理性が、うなり声をあげた。今すぐ、逃げるべきだ、と。理性と本能が、同じことを言っている。本格的に 危険かもしれない。

「あー、何でこんなことになっちゃうかな？」

私が本屋に行ったせいだということは、置いておく。あの老婆のせいだもん。私悪くないもん。悪いのは老婆だもん！

「うし、この町を出よう」

頭を掻きながら独り言を言った。ふう、溜息が自然にでた。殺られるなら 殺り返す。いつでも、殺す。覚悟なら、ずっと昔からある。 4年前から 。

「ねえ、お姉ちゃん？」

小さい子供が、話しかけてきた。

「なあに？」

と尋ねた。

「僕のおばあちゃん、殺したでしょ？」
ぐにやり。

子供の顔が歪んだ。

「殺してあげる。殺して……」

「あああああああああああ！？」

言葉が声にならず、奇声が出た。その時、白い閃光が走った。かろうじて、避ける。ナイフを構える。私の手は、震えていた。殺人

れ！……」

老人が、元通りの姿に戻った。ナイフを右手に持ち替える。老人に、そのナイフで斬りかかる。今度も、あっさりと斬れた。悲鳴が聞こえた。

「きゃあああああ！」

「！？まずいつ」

逃げよう！転移

町の外に出た。

連鎖（後書き）

どうしよう

話が全然

出てこない

585です。いや、575にしたかったんですよ！？でも無理だ
っただ！

……すいません。はい。でも、話が全然出てこないんで
す。

……誰に言っているんだか……。

死霊（前書き）

死霊

ばんっ、と景色が変わった。転移の強烈なりバウンドが体を襲う。

「痛っつ……」

後先考えずに戦ってしまった。

生け捕りも出来なかった。

何やってんの？私？

「も　　！やだ　　」

最低。あの老婆のせいだ。何故に金に拘るかな？

まあ、後悔先に立たず、なんだけど。石を蹴る。こっん、という音が聞こえた。そう言えば、1000万のぼったくり本にこう書いてあったけ　　。

・死霊……人へ乗り移り、その人物を通じて人を殺す。

対処方法としては、乗り移られた死体に、浄化の魔法を使い、炎で焼いてから死霊に無関係の人の骨を捧げる。

たぶん、まんまこれ。あつ、1日目のあの通路！あそこで人が死んでいたような……よし。

「……転移……」

あれ？死体がない……。魔物のせいかな？

「……探知……」

脳内に地図が出てくる。場所は　　やばっ、赤き龍の巣？まあいいや、行こう。

さあ、着きました。赤き龍の住み家です。禍々しい気配が漂っています。さあ、赤き龍は居るのでしょうか？居ました！赤き龍です！ただいま飯を食べております。あれは　　？像です。像を食べています。お　　つと？丸のみです。今から寝るみたいです！というわけで……Let's go！いやいやいや、無理ですよ。ありゃあ油断も隙もない眠り方ですぜ？片目開いているし……

・・・いや、強行突破だ！

走って龍の所に行く。すると、龍が起き出した。

「なんだ？人の娘よ」

重々しい声が、頭の中に響く。

「死霊に乗り移られていない人の骨が欲しいのです」

「人の死を軽く見ているのか？人の骨を手に入れるなど」
なら、あんたはどうなのよ。心の中で突っ込む。

いきなり、龍が攻撃をしてきた。は？何故に？

「ちくしょう！仕方ない、殺つてやる！・・・水龍よ、水を奴隷とし、あの者を傷つける！・・・」

水の龍を召喚する。水の龍が赤き龍を攻撃した。しかし、水の龍は蒸発してしまう。

「は？何て出鱈目な・・・闇と空間よ、赤き龍を暗き闇に引きずりこめ！・・・」

空間が割れる。その中は永遠に続く闇だ。赤き龍は、その空間に引きずられる。が、再び空間が割れ、赤き龍が出てきた。しかし、私はもう人の骨を手をしている。

「・・・転移・・・」

強烈なりバウンドが私を襲った。

「!？」

「人の娘よ、我を甘く見たな？」

「なんで、赤き龍がここに居るの？まさか・・・テレポ―

ト？でもあの呪文は私のオリジナルよ？何でなのよ？」

赤き龍の攻撃が私に直撃した。

死霊（後書き）

読んでくださった方、見てくださった方、ありがとうございます。
どうしよう・・・殺人者の方も居場所の方も話が？

文・オ・が・欲・し・い・

おほんっ。取り乱しました。失礼。

どうしよう・・・。

決着（前書き）

なんかどこかで見たとような気がするなあ、と思いました。これに非常に似ている作品などがありましたら、（自分に似ている文体はそうないと思いますが）言ってくれるとありがたいです。

決着

どおん、と爆発音。それは、大地が割れるのではないか、と錯覚するほどの大きな音だった。普通ならば、その爆発の中心にいた少女が生きていられるわけがない。そう、普通なら。

私は、確かに生きています。臓器は幾つも破損しているだろうが、心臓と脳が生きていれば、私は生きているのだ。想像する。私の元の姿を。すると、私は、生き返った。いや、元に戻った、の方が正しいのだろうか。人間は、生き返ることは世界の理　いや、宇宙の理に反することになる。そんなことはどうでもいい。私と言う存在は、確かにこの世にあるのだから。ごめんなさい、お母さん、まだ私は貴方のところへ行きません。

「……………あの龍に裁きを……………」
私には　やるべきことがある。

「……………死の恐怖を……………」
私は　お礼を言わなければならない。騎士団長に。

「……………絶望の色を……………」
私は　今を生きななければならない。犠牲になった人々のために。

「……………生きることの苦しみを……………」
私の想いが、力になる。

「……………破滅せよ！……………」
龍の中から何色とも言えない光が出てくる。その色が、何色かは分からない。しかし、その色は、温かかった。そして、龍が、消えた。龍の存在が。

私に龍の鱗が落ちてきた。まるで、薔薇の花弁がゆっくりと舞っているように見えた。その鱗は私の勝利を、生きていることを、祝ってくれるように、パラパラと、舞っていた。

私は、驚きを隠せなかった。巨大な爆発音の後、ギルドは混乱し、経営ができる状態では無かった。やっと落ち着きを取り戻した時、（と言っても数分の間だった）また私は衝撃を受けた。あの、赤き龍の気配、魔力が消えたのだ。ということは、寿命や病気では無いということだ。また、大きな爆発が聞こえたことから、戦闘が起きたということ。それを想像出来た。それは、赤き龍が殺され、その力が吸収されたことを表す。ということは、だ。赤き龍の2倍以上の力の持ち主（それが多人数）が現れたということだ。人か魔物かはこの際どうでもいい。

「ギルド長！」

「分かっておる！今、実力の良い者を派遣しようとしているところじゃ」

あー、休みたいなあ。本当なら今頃は彼氏とデートだったんだけどなあ。彼、どうしたんだろ。たしか、あと1カ月ぐらいでマーギオに着くって言っていたのに……。彼 どうしたんだろ？

私は、満身創痍でベッドに寝転んだ。疲れた。1か月ぐらい睡眠を取るべく、1か月分の食料を胃に入れる私は、冬眠まへの熊のように見えるのではないかと真剣に考えたりもした。まあ、どうでもいいのだけれど。私は、いつかのワインを取り出して、グラスに唇をつけて、グラスを傾けた。

決着（後書き）

誤字、脱字、使い方が違う文や単語、話が矛盾している、などの指摘があれば、指摘していただけたらな、と思います。ちらっとでも、次話を覗いてみてください。あと、ギルド長のセリフ、ひらがな多っ、と自分で書いていて思いました。ところで、は所で、良かったのでしょうか？自分はもう眠りにつきます。……すいません、関係なかったですね。

読んでくださり、ありがとうございました。

魔王

1か月たった。さあ、儀式を始めるか。老人の死体を右側に置き、道で死んでいた男を左に置いた。

「・・・・・・・・浄化せよ・・・・・・・・」

何か焼ける音がした。

「・・・・・・・・火よ、私の明かりとなり、我が道を照らせ！・・・・・・」

声が聞こえた。低い、女の声。

「よ・くも・・・・・・・・私を・こ・殺・・・・・・・・したな？」

最後のあがきか。

「呪つ・て・やる・ぞお」

いい加減黙れと言いたい。

「・・・・・・・・」

声が切れた。死んだか。

よっしゃあ、これで死霊に束縛されないぜ。

「・・・・・・・・転移・・・・・・・・」

私は、門の前に居た。ついでに言っておくと、私はあの戦い（老人戦）の時の目撃者の記憶を消しておいたから、私は尋問に引っ掛からない。

「身分証を見せてもらう」

二人の兵士が槍を交差させながら言ってきた。

「はあ、ギルドカードです」

普通にギルドカードを渡す。

「ギルド長！こいつです！」

兵士の一人が言った。

は？何故に？私捕まるようなミス犯したっけ？

「ふむ、お前さんが、か。そうは見えんけどのう」

ギルド長が言った。

「あのー、何のことがですか？」
私は問う。

「おぬし、赤き龍を殺したじゃろ？」
え？いけない事だったの？

「まさか、信仰していたんですか？」

「そんなことはない。しかし、それほどの実力を持つ危険分子を、放つてはおけないのじゃ」

「なら、逃げさせていただきます」

心の中で転移、と言うと私の姿は、空気に溶けるように消えていった。

何なのよ、あれ。腹立つ！正当防衛だ！もう、あの都市を滅ぼしてやる。魔王でも脅して襲わせてやる。．．．．．そのためには、もっと力を吸収して強くならないと。魔王の部下を皆殺しにしてやる。心の中で恐ろしい事を考えていると、前の人にぶつかつた。

「ごめんね、前を見てないで」

可愛い女の子がそこに居た。その女の子は、泣いていた。
やばっ、もしかして私のせい？

「お母さんが．．．．．お母さんが．．．．．」

どうやら違うらしい。

「病気にかかっちゃって、きとくなんだって」

「そう？じゃあ、お姉さんが治してあげよう」

普段だったら気にしないが、なんかの縁だし、助けてあげよう。

「ほんと？」

目をキラキラと輝かせながら、女の子が聞いてきた。

「じゃあ、お家についてきて？」

本当に可愛いなあと思いなながら女の子についていくと、そこは魔王の城だった。

．．．．．何故に？まだ計画の途中なのに？助けてー！

魔王（後書き）

何というご都合主義・・・。。あと、魔王が終わった現時点の本文の合計がぴったり1万文字になりました。いえー、パチパチパチ

読んでくださった方、ありがとうございます。

睡眠（前書き）

今回は、いつもの睡眠についての秘密です。

睡眠

おほんっ、と咳ばらいをする音が聞こえた。

「貴方が私の家内を助けてくれるのですか？」

と、魔王が聞いた。魔王は、想像していた傲慢で腹黒そうな人物ではなかった。むしろその反対と言ってもいいだろう。ドングリミたいな大きな目、その眼球は、サファイアのように綺麗だ。高い鼻引っ込んだ唇、しっかりとした輪郭。とてもバランスの良い顔で、爽やかな感じを醸しだしている。ようは、イケメンなのだ。その妻と言っのだから、とてつもなく美人なのだろうか。想像が膨らんでいく。

「ええ、貴方様の妻が病気だと聞いたので、急いで駆け付けた身です」

嘘だ。さつきまで魔王の城を破壊しようと思っていたことは言えるわけではない。

「ありがとうございます。早速ですが、妻の病気を治していただきたいのですが」

「はい、どちらにいらつしやるのでしょうか？」

「寝室です。今案内します」

魔王は、手を上品に返し、手のひらを見せて廊下の方を指した。歩くこと数分、やっと寝室に着いた。

「ここです」

魔王が言う。

「そうですねか……天よ、この者の邪気を取り除き、治癒せよ……」

ぱあっ、と魔王の妻から、赤き龍を倒した時の光が漏れだす。私は、眠っている間、無意識でこの技を覚えた。

突然、魔王の妻は閉めていた瞼を上げ、輝いた目で魔王を見た。

「欄……」

魔王が心配そうな声色で呟いた。

「春樹、私もう大丈夫よ！」

元気な声で魔王の妻が言った。

「そうか、良かったな！」

と、魔王。

かれこれ1時間ぐらい魔王と、魔王の妻がいちゃついているのを見たところで、私は眠りに就くべく空間魔法を使った。……………眠い。お休みなさい……………。

3時間ぐらいたっただろうか？私は外が騒がしくなったのに気がついて、外に出た。

「未癒殿、ありがとうございます」

「未癒様、ありがとうございます」

終わったー。なんか、魔王たち夫妻にご自慢のいちゃつきを見せていただいたせいか、非常に眠い。……………まあ、いつもそうなんだけどね。私の生活をまとめると、35%、活動。15%、食事。50%、睡眠。というふうになるからね。うん。12時間以上寝ないとだるくてだるくて。

もう寝る。

お休みなさい。

睡眠（後書き）

話の脱線。

急な展開。

文法の間違い。

うん、駄目ですね。

ちなみに、睡眠が50%なのは、魔力が多すぎてその量に耐えられないため、寝て、少し発散させるためだといつどこでもいい設定があつたりするのです。

盗賊

町に着きました！やった！暇で仕方がなかったからね。

普通にギルドカード（魔法で赤き龍を倒した痕跡は消してある）を出す。と、門番に泣きつかれた。

「助けて下さい！最近盗賊が来て、強奪を繰り返されているのです。俺も、つ、妻と息子を人質に……」

仮にも女の子の前で泣くことが恥ずかしくないのだろうか？それとも、私、男だと思われる？そしたら、結構シヨックだ。

「そうですか……。ご愁傷様です。じゃあ、助けたら、この町の市民権をください」

居場所……。発見か？

「そうですか！？ありがとうございます！」

うん。眠い……。

この町について、2日がたった。

「盗賊だああああ！」

村人の叫び声。

「おとなしく、金目の物と食料よこせ！」

「……。邪なる心の持ち主よ、滅びゆけ……」

盗賊たちから火が出て、外は修羅場となった。

「うわあああああ？」

「な……。何……。だ？」

「あ、熱い！ぐわあああ！」

盗賊は、異口同音に熱いと言った。うん。当たり前だね。熱いさ、そりゃあ。

「ありがとうございます」

と、村人にお礼を言われた。

まあ、お礼を言われなきゃやってらんないよ、と思いつつ、私はこう言った。

「いえいえ、困っている時に助け合うのは、お互い様……」
「？」

言葉の途中で、風の刃が私に放たれた。急いで避ける。

「！？何よ？」

「あんたが、わたしの彼を殺したのね？あんたが、あんたが」

女の声は徐々に小さくなっていく。

「彼？何のこと？」

私は、何のことが分からなかったので聞いた。

「惚けるなっ！あんたが、死霊の浄化儀式をしているのを私は見たのよ！死霊に追われて、逃げていた所に私の彼がいたから、殺したんでしょ？死体の第一発見者の記憶は消しておいたようだけど、私には通用しないわ！」

大声で、言われた。村人の私を見る目が、尊敬から軽蔑に変わる。

「悪魔め、家の村を壊そうとしたのか！」

突如、男から声が上がる。

「ち、違うわ！」

うるたえる私に、次の言葉。

「お前なんか死んじゃえ！」

小さな女の子だ。

次々と聞こえてくる罵倒に、悲しくなり、私は転移した。

盗賊（後書き）

……。
いっぱい書ける人を尊敬します。

人物紹介と世界観（前書き）

人物紹介と世界観

人物紹介

大村未癒・・・呪われし者として生まれた。魔力は、世界1。スタイルは、結構良い。

顔・・・普通に綺麗。特徴はないが、全体的に顔は良い。
目の色は、茶色で、肌は、真っ白。夜では幽霊と間違えられることもある。本人は、自分のことを、そんなに綺麗ではないと思っている。

性格・・・過去の所為で負った傷を打ち消すべく、明るい性格になっている。
好奇心旺盛で、『やられたら、やり返す！』をモットーにしている。

特技・・・固有スキル【魔法想像】を持っている。また、剣は、騎士団長レベル。

騎士団長・・・本名 中岩北竜 名前が名字みたいで、気に入っていない。

未癒にこの名前で、からかわれたことがある。

顔・・・老け顔。肌は、白いが未癒程ではない。

性格・・・良い。だから結構モテる。

特技・・・剣術。王国1位レベル。未癒に追い抜かれて、

かなりショック。

世界観

平和。以下、身分の違い 力が強いほど、権力が強くなる。

王様>大臣>魔剣士団長>騎士団長>剣士>魔術師>商人>一般市民>奴隷>

用語

・呪われし者 魔力が多すぎて、コントロール出来ない限り、必ず魔力が暴走してしまう、先天性の病気にかかっている人のこと。その力のせいで差別されている。

・魔属性 魔力が何を操れるかが決まること。
想像、時、空間、闇、光、水、炎、風、雷、土、がある。 呪われし者は、全属性持っている。

・固有スキル 自分一人しか持っていない、特殊な魔法のこと。

火星（前書き）

タイトルは、関係ありません。ただ2文字縛りにしたかっただけです。タイトルからSFを期待した人は、戻るボタンを押した方が、時間を使わないと思います。

火星

私は、あの女の後をつけ、その女を悪人とした。あの女の泣きかけた顔を見たときは、おかしくて、笑いが出そうだった。でも、私の彼を殺した罪は、大きい。世界を壊してでも、あの女をいたぶつてやる。我ながら、狂った思考だと思う。でも………。私はあの女を許さない。悲鳴をあげさせて、肉を裂いてやる。何回も治癒魔法をかけて、発狂させてやる。そして、殺す。

最近、美紀の様子がおかしい。元からネジが2、3本抜けているような子だが、明るかった。彼氏が出来てからは、笑顔を絶やさなかったのに……。どうしたの？と聞いても、あの女が、という言葉を呟くだけだから、浮気でもされたのかな？うーん。悩んでも仕方ない。さあ、それより仕事をしないと！

朝、未癒は起床し、辺りを見渡した。その視線の先には、事件の元凶となったあの本があった。そして彼女は、その本を魔法で燃やした。

あの本には、事件を起こす何かがあると思ったからだ。その灰を、穴に埋め、念入りに土を戻した。彼女は、一息ついて、朝食にしよと部屋（空間）に戻った。

朝食は、スクランブルエッグと、魔物の肉、それとパンだった。彼女は、魔物の肉とスクランブルエッグをパンの上に載せ、パンを折り曲げた。少し載せすぎた所為で、こぼれそうになってしまう。しかし、日ごころ戦闘ばかりしているからか、バランスをとり、なんとかこぼれずにすんだ。そして、こぼれそうになっている、肉を下品に食べた。

美女が、パンを上を持ってきて、下から大きく口を開ける姿は、ゴリラが鳥の雛の嘴をつけているような違和感があった。いや、白

鳥の顔が、そこら辺に居る40代のおばさんになっているような

。言いだせばきりがなが、とても残念な姿だった。

でも、誰も人が居ない為か、気にせず食べ終えた彼女は、昼寝をしようとしてから、食べた後に寝ると牛になるという騎士団長の言葉を思い浮かべ、ベッドから出た。そして、頭を掻きながら、本を出して読み始めた。タイトルは『火星に向かう泥棒』という、何とも見ていて微妙な雰囲気になる本だが、本人は気にしていないようだ。

ここで、その本の内容を一つ紹介しようと思う。この本は、大泥棒サム・ターンが刑事ポ・リスに追われて、火星まで逃げようとする話だ。

サムターン錠を開けるのが得意な泥棒だから、サム・ターンという名前なのは、仕方がない。しかし、ポ・リスというのは、あからさますぎではないか。ポリスとは、言うまでもなく警察のことであり、それを人名に使うのはおかしいと思う。その他もろもろの問題があり、色々とおかしい点があるが、今回は言うのをやめておこう。さて、そんなおかしい本を読んでいた未癒は、案の定つまらなかつたのか、ベッドの上に本を放り投げ、彼女は眠りについた。

火星（後書き）

短いです。あと、思いました。3人称書きやすっ！と。まあ、短いです。はい。

読んでくださった方、ありがとうございました。また、・・・
・。びみょーに変えました。というタイトルの活動報告で、小説を載せています。興味があったならば見てみてください。

精霊

「あゝあ、暇だなあ」

と、未癒は言い、歩き始めた。しかし、その速さは一般人には、早歩きであり、ゆっくり歩いていると思っっている彼女とは違い、すれ違う人は、急いでいるのかと思うほどの速さだった。

彼女は足を止め、周りを見渡して地形が良いことを確認すると、魔法でテントを組み立てた。空間じゃあ、味気がないため、外で寝てみるつもりらしい。ごそごそと寝袋にくるまって寝る姿は、朝食のときとは反対に愛護動物を思わせる。

すやすやと寝る彼女は、何か白い物質が通り過ぎるのを、気がつく筈がない。しかし、その白い物質は、彼女の耳元に行き、何かを囁いた。すると彼女は、寝ぼけ眼のまま何やらもそもそと言葉を発した。

その瞬間、青色の魔法陣が現れ、白い物質と彼女だけを包み込み、ぱあっと発光した。

朝起きると、白い人もどきが居た。いや、何とも言えないような。

「誰？」

勇気を出して聞いてみた。

「やだなあ。僕だよ、リュウ＝コーラス。君と契約したじゃないか」

コーラスって、イソギンチャクって意味だっけ？あれ？違ったっけ？まあ、いいか。

「契約？何よ、それ」

本当に何だ。騎士団長のお家に帰りたい。

「僕は精霊だよ」

精霊って何よ？偽物の妖精になら会ったことがあるけどね……

精霊（後書き）

はい、テンションがおかしいです。あれ？徹夜明けだからかな？

（ 作者は、8時間は睡眠を取りました）

あれ〜……………。まあいつか。

遊戯（前書き）

yes・ノリで書きました。

遊戯

「ねえ、コ？」

と彼女は話しかけた。コとは、リュウ＝コーラスのコーラスからとった名前で、精霊のことを指す。

「未癒、なに？」

と精霊は聞く。

「暇じゃない？」

いつも暇と言っている彼女が言っていると、説得力がない。と思いつつも、コーラスは言った。

「うん……確かに　暇だねえ」

「そうよね。よし、ゲームをしない？」

「嫌だ！」

即答である。何故なら、ゲームと言って、尻尾を掴まれたり、顔面にパンチされたりしたからだ。精霊は、痛みを感じなくとも、不快感を感じるのだ。

「早いわね。大丈夫よ。……たぶん」

少し間が空いていることに気が付き、コーラスは、自分を膜で覆った。ぷかぷかと水球が浮かんでいるのは、見ていて癒されるが、中に入っている精霊を見ると、そんな気は失せるのだろう。あんな神聖な空気の欠片もないものが、精霊なんて。と、彼女は思

いつつ言った。

「大丈夫よ……何よ。そんなに信用がないの？」

「うん！」

短い、はつきりとした声が憎いと感じたことはあったか、と彼女は考えた。

「平気よ。怖くないわ」

ぼそつと、痛いけど。と、彼女は呟いたが、精霊には聞こえていなかった。

「本当？」

「うん」

じゃあ行くよ。と言った精霊は膜から出てきた。

もう少し人を疑うべきだと彼女は思いながら、でも、こっちのほう
が楽でいいかも、とも考えた。すかさず魔法を掛けて、動けなくす
る。

「ゲームはゲームでも、罰ゲームよ」

にやり、と笑いながら未癒は言った。

「ええっ？そんなこと聞いてないよ！」

悲痛な叫びが聞こえるが、彼女は無視した。痛みを出させる魔法で、
コーラスに痛みを感じさせる。

「うるさいわね。まずは、私の魔法の実験体になりなさい」

ばあん、と音がして、コーラスは砕け散った。が、すぐに再生する。
そこに魔法が入る。

「うわ　　！いじめだ！」

遊戯（後書き）

いっつもですが……。。少ないですね。
読んでくださった方、ありがとうございました！

地獄

「うっ、酷いよ……」

涙（おそらく、体を変化させて作っているのだろう）を流しながら、コーラスは憤慨した。

「じゃあ、お詫びにゲームをしようか？」

「嫌だ！」

前より拒絶反応が大きくなっていた。彼女の中では、ゲームという言葉は、禁句になったのに違えない。

「なによ！私の暇つぶしが出来ないじゃない！」

「じゃあ、しなきゃあいじゃん！このっ……アンポントン！」

最後のアンポントンは、非常に強く発音した。

「私がアンポントンだっていうことを数学的に、『証明』してみなさい。そしたら、認めてあげるわ」

偉そうに、未癒が言う。

「別に、未癒に認めてもらわなくても、未癒はアンポントンだよ！」

コーラスも、負けずに言い返した。

「世界の何人の人が、それを認めた？」

「うっっ……」

口喧嘩では勝てないと、コーラスは思った。どうせ、また無限ループに嵌まるのだろう。そして、落とし穴に落とされるのだ。精神的に。

「あゝあ。もう、未癒には勝てないなあ」

コーラスは、負けを認めた。

ワタ……シハ……ワタシハ……ワタシハ……ワタシハダレ？

気がつけば、混沌の中に居た。

「134番！」

怒鳴り声。

名前は分からないが、何となく、これが自分だと分かった。

「134番！早く！」

急がないと、まずいような気がするので、すぐに行った。

「134番。魔法により、多くの者を殺させた。判決！地獄に3年間服役の後、転生！」

ゴーン、と鐘がなり、私（134番）は奈落へ落ちて行った。

拷問（前書き）

すみません！もう、話が思いつかないです。しかも、出来が悪い。
DIVERをこっちより優先させようかなあ？

拷問

コ……ココハ？ココハドコ？

私は、見たものが信じられなかった。

人が、次々と拷問にあっている。

「い、嫌……」

思わず、声を漏らす。

「誰だ？ああ、134番か。じゃあ、3年間、お前は死ねないから。せいぜい発狂しないようにね。あ、発狂した方が良いか。何も感じないもんな。じゃ、足からいくかな。火あぶりの刑。たぶん、熱いよ」

赤い体をして、白い角を一本生やしている鬼？が言った。

突如、足に激痛。下を見ると、

「う、嘘……いやあああああ」

火が付いていた。その途端、記憶が蘇る。 私の娘の白の炎

が、全てを燃やした

「あ、はは」

笑いが漏れる。皮肉だ。村の皆を間接的に殺した私が、死んでまで火を受けるなんて。ああ、だから魔法を『使わせた』ことによる罪なのか。3年たったら、何をしよう？意識が途切れた。

「……きろ！お……！起きろ！」

水を掛けられた。足を見る。驚いたことに、火傷がなかった。

「夢じゃないよ」

私の淡い希望は、その言葉で消え去った。本能で、それが嘘ではないと信じる。

「ここは、何処なの？」

地獄だとは、信じたくない。

「ん？神に聞かなかった？」

神？

「神？閻魔大王じゃあないの？」

ふと疑問に思えた。

「閻魔大王？あ、待って、記憶を読むから。ああ、人間界は面白いな。閻魔大王じゃあないよ。だいたい、世界は3つあるんだけど、その世界に1人ずつ神が居るんだ。パラレルワールドもあるけど、それは、大神様の管理外だからね」

「大神様？誰？」

大神様ということは、偉い人なのか。

「偉い人」

ぱつさりと切り捨てられた。

「あ、もう、あの拷問好きが来るから、ごめんね」

目の前には、あの鬼が居た。

「さうて。次は、体中に針を指すよ。何本刺さるかなあ？電流も流してあげようか？」

思案

脱獄。まさに地獄から脱出するという意味では、言葉通りだろう。私が脱獄をしたいというのは、つい最近のことだった。あの、名前も知らない奴に聞いたところ、ここから出る方法は、4つに絞られた。

- 1、 神を殺す。
- 2、 刑期が終わるのを待つ。
- 3、 上へ行く。
- 4、 神に頼む。

だ。1は、理想だが、あの化け物を殺せる筈がない。2は論外だ。ここで刑期が終了するのを待っていたら、発狂してしまう。3は妥当だろう。しかし、どうやって上へ行けるのだろうか。4これしかないだろう。どうしたら、良いと言ってくれるのだろうか。

名前の知らない奴。あいつは、クラ ロ＝ノス タと言っらしい。

「クラ ロ？」

呼んだら、出てきてくれるほどの仲になった。

「どうした？」

間延びした、聞きなれた声。

「脱獄の方法の4番って、どうやるの？」

「4番？なんだっけ」

「神に頼む」

「弱みでも握ればいいんじゃない？」

「ここで弱みが見つかるはずがない。」

「そうか……。どうにかなればよかったんだけど……」

「コー？どこにいるの？」

反応がない。しまった、いじめすぎたか。

「・・・・・・・・探知・・・・・・・・」

我ながら、無駄に魔力を使うな、と思う。ぴぴっと反応が出る。

「なんだい？」

渋々といった感じで出てきた。何も考えていなかった。

「なに？」

再び同じ言葉。

「あそば・・・・・・・・」

ぶつり、と通信が途絶えた。

「コー！？」

脱獄……脱獄ねえ。

クラ ロノス タは、親友である134番（清瀬美紀）の提案に悩んでいた。彼女は、俺も一緒にここからでないかと言ってくれた。

どうしたら……。その時、閃きが頭の中によぎった。1番。神を殺す。殺さなくても、気をそらせれば あれ赤鬼に新たな餌を与えれば、赤鬼は何でもするだろう。なら、新たな餌を。

クラ 口は、人間界を覗き始めた。

地上

地獄からの脱出。それがもう少しで達成しそうだ。クラー口が、新しい人を入れてくれるそうだ。

彼女の頭は、『責任』をとって、未癒を殺すことしかなかった。たとえ、それが、人を巻き込んでも、自分の刑期を増やそうとも。彼女の考えは、もう、未癒を殺すこと。たったそれだけ。彼女も、おかしいと思っただが、何故そうだったのかが分からない。早く、責任を。彼女の心は、すでに粉々に壊されていたのだ。

「鏡花、そろそろだよ」

クラー口の呼び声。時間か。

「そう？ありがとう。あなたのこと、忘れないから」

「……………それは無理だよ。地獄から出たら、地獄の記憶は、自動的に消される」

頭に、ハンマーで殴られたような衝撃。すぐに、錯覚だと理解した。私の存在意義は、復讐だけだと思っただが、友情もあったのか。

「あ、あり……………がとう」

涙がこみ上げてきて、上手く話すことができない。

「時間だ！急いで！」

「ええ！」

あの赤鬼め……………。何故、違う奴を拷問している……………。
奴の仕事は、134番のはずだ。……………まさか！

急いで一つの目を、双眼鏡から覗いたように見える設定にする。神になると、自分の体や他人の体も変化させられる。

「やはりか……………」

怒りでしゃがれた声に、部下は危機感を覚えた。そして、一人の部下が、問うた。

「どうなさいましたか？」

「黙れ、我は機嫌を害しておる」

「は………」

はい、と言おうとした悪霊は、何故言葉がでないのかと、不思議に思っただけ自分の体を見た。いや、見ようとした。すでに、悪霊は、首と胴体がつながってなどいかなかった。

その様子を見ていた悪魔たちは、次は自分がやられるのかと、恐る恐る周りを見渡した。

地獄神は、恐ろしい顔で地獄へと行く。

赤鬼は、黒い影を見た。そしてその瞬間に息絶えた。

鏡花は、追ってくる神をみた。その顔は、まさに鬼であった。いや、鬼より怖いかもしれない。このままでは、連れ戻される。急いで鏡花は穴に入ると、上へ上昇していった。その下を、神が徘徊する。鏡花は、ついに地上へと降り立ったのだった。

地上に出た鏡花は、何故自分の記憶があるのかと訝しんでいた。しかし、深くは考えなかった。

……それが、2度目の人生での鏡花への罰だったのだ。

開門

未癒は、馬車が2台も横に並んで走れるほどの広い道路を、のんびりと気の向くままに歩いていていた。

不意に、懐かしい気配。

「お、お母さん？」

「どうしたの？ 未癒」

コーラスの質問を無視して、未癒は走りだした。そして、全速力で2〜3分走ると、息切れがした。立ち止まる。気配は、だんだんと近くなっていた。

コーラスは危険を未癒に知らせようとした。明らかに危ない気配。未癒は、母に再会できる喜びで、気が緩んでいる。その母の気配が、明らかにおかしい。狂っているとしか言いようがない。禍々しい雰囲気。その殺気は、未癒が赤き龍を倒して手に入れた、現在の殺気よりも、何十倍も濃い殺気。殺気ともいえないような危険な雰囲気だった。

未癒はまた走りだした。途端、目の前に大きな影。赤き竜だった。

地獄神は、またもや焦っていた。地獄から地上まで行く通路が開いてしまったのだ。地獄神は、急いで戻そうとした。しかし、目の前には 最高神。地獄神たちの生みの親であった。文献にも記されていない第4の神。その容姿は、異常なまでに美しく、同時に禍々しかった。神でなかったら、その溢れ出す殺気に、訳も分からずに、死んでいただろう。地獄でも死ぬ。そんな殺気。

「なんでこんなに愚かな真似をしたの？」

「申し訳ありません……。しかし、赤鬼が」

言葉は、最後まで言えなかった。

最高神は言った。こんなに出来の悪い息子などいらぬ、と。地獄神は、絶望したまま死んでいった。

一方、未癒は、赤き龍の復活で、赤き龍から奪った力を奪い返された。いきなり、力が抜ける。膝が折れた。赤き竜は、その隙に、赤き龍は空へ飛んだ。未癒の上から、赤き竜が落ちようとしていた。

「クラーロ？」

鏡花は、目の前にいるクラーロ　青鬼に話しかけた。クラーロも、なんで鏡花がいるのかと、驚いた。

なんでここにいるの？　と二人の声が重なった。そして、二人で笑いあった。

鏡花とクラーロは、『責任』をとってもらう未癒がいる場所に向かうために、ゆっくりと歩き出した。まるで、その場所を離れたいというように。そして　未癒を殺したくはないというように。でも、二人はゆっくりとだが、未癒の方向に向かっていった。

開門（後書き）

他人行儀って、書きやすいですね。なんか、ハッピーエンドになりそうな予感が……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8978x/>

居場所探しの旅

2011年12月11日21時52分発行